

観点別評価の意義と その実践のポイント

新課程において、なお一層その実践が求められている観点別評価。

しかしながら、小・中学校に比べると、高校現場では観点別評価の定着は十分とは言えず、4観点の中でも「知識・理解」の評価に重きを置く傾向がある。

今後、高校に観点別評価を定着させていくためには、

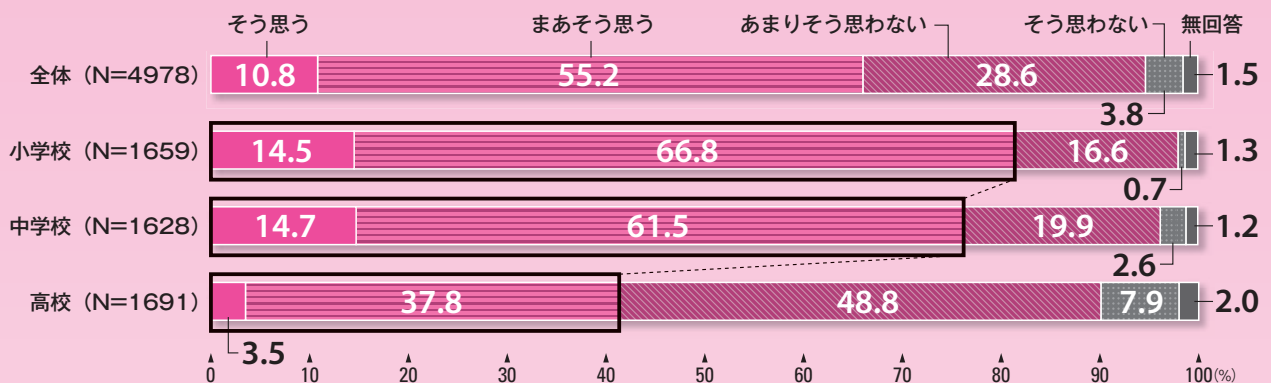
その意義をまず現場の教師が理解することが重要になる。

そこで、今号では、観点別評価の先進的な研究・実践例を基に、

観点別評価の意義とその実践のポイントを考える。

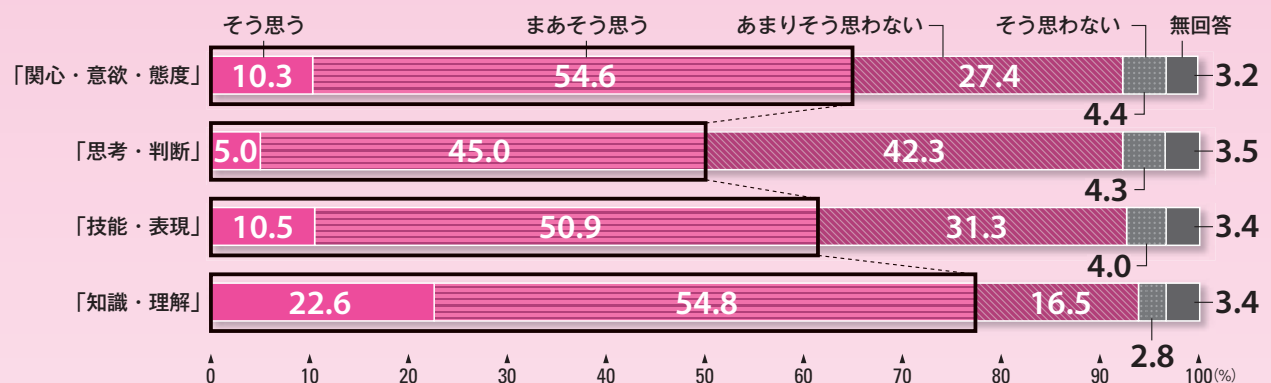
● 4観点の評価の定着に関する小・中・高等学校の教師の意識の比較

いわゆる4観点の評価は実践の蓄積があり、定着してきている



● 観点別学習状況の評価の実施に関する高等学校の教師の意識（観点ごとの比較）

評価の資料の分析、評価の決定を円滑に実施できている 観点別学習状況の評価の実施状況 [高校 (N=1691)]



インタビュー

評価を軸にして

授業を改善していく

逆向きの発想が必要

東海大外国語教育センター准教授 長沼君主 な お ゆ き

観点別評価に見合った授業になっているか？

新課程では、きめ細かい学習指導と一人ひとりの学習内容の定着のため、生徒の学習状況を分析的に捉える4観点による評価が実施されている。だが、小学校や中学校と比べると、高校では観点別評価はまだ「評価のあり方の1つ」とどまっているケースが少なくない。しかし、東海大外国語教育センター准教授の長沼君主先生は「観点別評価の理念は、授業改善を求める『指導と評価の一体化』にこそある」と説明する。

『知識・理解』『技能』『思考・判断・表現』『関心・意欲・態度』の

4観点を踏まえて評価するということは、4観点を統合的にバランス良く評価できる授業が求められているということ。また、定期テストなどの筆記テストで測れる結果だけに基いた偏った評価から脱却し、授業中のパフォーマンス評価やポートフォリオ評価など多様な評価を組み入れ、日頃行っている授業内の活動での取り組みも客観的に評価することは、生徒に対する説明責任を果たすことにもなります（長沼先生）

だが、高校に観点別評価の理念が浸透し、実際の授業に反映されているかと言えば、現状は必ずしもそうとは言えない。その背景には、「4観点到明確に分けて評価できるの

か』『関心・意欲・態度』などは、印象評価になってしまっているのではないか」などの戸惑いが今もって現場にあることが大きい。だが、新課程において、教科を問わず求められることになった「言語活動の充実」は、知識・理解偏重の授業観にとらわれず、観点別評価を組み入れた言語活動や評価のあり方を各校が改めて見直し、授業を変えるきっかけとなる」と長沼先生は考える。

「新課程でうたわれている言語活動は、協同学習やプロジェクト型学習などでの言葉を使った活動を通して身に付けた知識を使える知識にすることで、思考力や判断力、表現力を高めることを狙っています。それによって、知識重視型の教科では測りにくかった『思考・判断・表現』『関心・意欲・態度』といった観点が評価しやすくなるはず。ただし、知識や理解のないところに深い思考や判断は宿らず、表現をするためには十分なインプットが必要となります。関心・意欲・態度も何もないところから表れるのではなく、知識・理解や技能と密接に結び付いています。言語活動における具体的な



ながぬま・なおよき 清泉女子大文学部英語英文学科講師、東京外国語大世界言語社会教育センター講師などを経て現職。専門は言語学習動機づけ、言語テスト論など。文部科学省「外国語教育における『CANDOリスト』」の形での学習到達目標設定に関する検討会議「委員などを務める。著書に『動機づけ研究の最前線（北大路書房）』など。

活動への取り組みの度合いに、質的にしっかりと位置付けることで、挙手や課題提出の回数などといった数値化しやすい表層的な関心・意欲・態度だけにとられない、深く知ろうとする態度や積極的に考える姿勢などの評価が可能となります。観点を個別に考えるのではなく、それぞれを関連づけ、統合した評価のあり方とそれを保証する言語活動の充実について議論していくことで、観点別評価の仕方や客観性の維持についてのコンセンサスが生まれてくるでしょう」

内発的動機づけを重視した 授業設計が重要に

英語の場合、新課程ではこれまでの「英語I」に代わり、インプットに基づいたコミュニケーション活動を重視した「コミュニケーション英語I」などが設けられた。そして、授業は英語で行うことが基本となるなど、理解に基づいた表現を通して、4技能を統合的に育成するための環境整備が進んだ。更に、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体化し、指導と評価の改善に活用することが求められている。

科目構成や目標の設定などが大きく変わった英語だが、福岡県立香住丘高校の「CAN-DOリスト」の共同研究にも取り組む長沼先生は、同校におけるスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の実践が1つの参考になると説明する。

「SSHでは『科学的探究力』の育成をテーマとして、英語での『伝え合う力』の育成との両面から研究を推進しています。中でも重要視しているのは、日常知と科学的知識と

の結び付けで、科学についての日頃の興味・関心を気軽に語り合う場として、『サイエンス・カフェ』の試みを始めます。生徒の知的好奇心を刺激し、探究力の土台をつくるには、教師が教科書の内容だけでなく、普段から分野に関連した話題に広く関心を持つことが大切です。日々のニュースや最近読んだ本などを話題に、教科を離れて語り合うことで、疑問に感じ、知りたいと思う探究力や好奇心、思考力の芽が育ちます。それを授業にうまくつなげて、教科の内容を深化させていくには、教師側の探究力と日常知を引き出す教材研究が必要となります。香住丘高校では、英語の授業においても、教科書を学ぶのではなく、教科書を通して何かを学ぶことに重きを置いており、認知・思考力を高めるための授業の発問シナリオ作りを行い、知識を使う中で興味づける仕掛けづくりをしています」

主体的に学び続ける人材の育成が求められる中で、定期テストや入試といった外発的な動機づけに依存した学習ではなく、興味・関心をベースにした内発的な動機づけによる学

習経験がますます重要になっていく。観点別評価とそれに対応した授業を構築することは、より生徒の好奇心を喚起しやすい授業をつくることにつながると長沼先生は語る。

「本来、評価を変えれば授業そのものも大きく変わるべきであり、授業を変えないまま、評価の仕方だけを変えるのは本末転倒です。評価、つまり育成したい人材・能力像から授業を設計する逆向き設計の発想が求められます」

出来る実感を高める仕組みは 全教科で必要

自律的な学習者の育成には、学問そのものへの興味・関心を生徒の内面に喚起するだけでなく、学習への自己効力、すなわち、出来るという実感を育み、学習過程を振り返り、内省する力を付けていく必要がある。そうした力は本来全教科で付けるべき力であると長沼先生は話す。

「英語で作成しているCAN-DOリストは、生徒の『出来る実感』『出来るようになりつつある実感』を高めるもので、自律的な学習を支える動機づけになります。現在は英語だ

けでの取り組みですが、授業が『出来る感』を感じさせる場となっているかは、他教科で観点別評価を考える上でも有効な試金石となるでしょう。人は、実際の活動の中で自分が出来たことを理解できると、次の段階の活動へのモチベーションも高まっていきます。目標を生徒が現実叙述し、次に出来るようになる学習への指針を示すという意味で、CAN-DOリストから得られるものは少なくないはずですよ」

日本では英語教育の取り組みとして注目されているCAN-DOリストだが、イギリス（*）、アメリカ、カナダといった国では、科学的探究力やリテラシーのCAN-DOリストも存在するという。学びに対する情意、態度をどのように見取り、評価していくかを考える上で、教科を超えた議論も今後ますます必要になってくるだろう。

次ページからは、観点別評価を基にした授業改善の事例として、長沼先生とCAN-DOリストなどの共同研究を行っている福岡県立香住丘高校の取り組みを見ていく。

*イングランド及びウェールズの英国ナショナル・カリキュラムでは、全教科にわたり、義務教育課程における到達目標レベルが定められている。